

資料 山之口獏：火野葦平作「戯曲 ちぎられた縄」 パンフレット掲載作品

松下, 博文
筑紫女学園短期大学

<https://doi.org/10.15017/10393>

出版情報：文献探究. 27, pp.19-30, 1991-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



資料 山之口 猊

火野葦平作「戯曲 ちぎられた縄」パンフレット掲載作品

松下博文

I ちぎられた縄

アメリカ合衆国議会は一九四九年七月に五千数百万ドルの沖縄軍事基地建設予算を計上した。極東の最重要軍事施設として米本國政府および合衆国議会在沖繩の地理的重要性を再認識した結果であり、こうして軍事戦略上の主要拠点として五二年四月には対日平和条約第三条によって沖縄は事実上日本から分離されアメリカの施政権下に編入されることになる。岩波新書版「沖縄戦後史」(昭和51年10月・中野好夫・新崎盛暉共著)によるとそうした沖縄の戦後史は一九七二年五月の施政権返還まで大区分三期小区分九期に分けられるという。すなわち主な項目を纏めれば次のようになる。

大区分第I期——小区分1期から3期まで——

米軍の支配権確立から昭和三十一年六月の島ぐるみ闘争までアメリカの軍事政策が一方的であった時期であり日本政府も具体的な対沖繩政策を持ち得ず、また本土国民の沖繩問題に対する関心もきわめて弱かった。

小区分1期——昭和二十年六月から二十四年後半まで——

米軍沖縄上陸↓日本軍の組織的抵抗終了↓米軍の支配が実効↓アメリカの軍事基地建設本格化、という時期でありこの時期は沖繩の軍事的重要性に関する米軍部の認識が本國政府および議会全体

に共通のものとなっていなかったので沖縄占領米軍は明確な統治方針をもたないままかなり場当たり的に住民を支配していた。

小区分2期——昭和二十四年後半から二十七年四月まで——

合衆国議会在初めて本格的な沖縄軍事基地建設予算を計上した時期から対日平和条約発効の時期まででありアメリカの分離支配に對して日米両政府あるいは日本国民はこのような動きに関心を示さなかった。

小区分3期——昭和二十七年四月から三十一年六月まで——

アメリカが沖縄を極東の要塞として太平洋に米比・米台・米韓などの軍事条約網を張り巡らし米軍支配に反対する大衆運動の弾圧と軍用地確保のための強制接収を強行して恒久的な基地建設を推進した時期で強権によって沖縄人民の闘いが分断され孤立した。

大区分第II期——小区分4期から7期まで——

過去十年の米軍支配に対する沖縄人民の島ぐるみの反撃から昭和四十二年二月までで沖縄人民の闘いがアメリカの対沖繩政策を破綻に追い込んで行った時期でありこの時期にはアメリカ政府は部分的な政策修正によって沖縄人民の闘いの矛先をそらしながら現状維持を図ろうとするが結局それに失敗して沖縄返還政策への転換を図った。

小区分4期——昭和三十一年六月から三十三年後半まで——

島ぐるみ闘争と呼ばれる全沖縄的規模での大衆闘争の爆発からこうした闘争の終結・通貨のドルへの切り替え・日米安保条約改正交渉開始までの時期で日本国民の沖縄問題に対する関心が高まった一方で沖縄社会の階層分化や革新勢力内部の主導権争いが顕在化した。

小区分5期―昭和三十三年後半から三十七年一月まで―

昭和三十四年十月に沖縄自民党が結成され三十五年十一月の選挙で琉球立法院の二九議席中二二議席を占めた時期で占領支配体制下の支配者層の育成がある程度日米の目論見どおり進んだ時期である。しかし、他方で沖縄県祖国復帰協議会が結成されて次の闘争への土台が築かれた。

小区分6期―昭和三十七年二月から三十九年後半まで―

米国の対沖縄政策の部分的修正が沖縄人民の権利要求に対して対応能力を失ってきた時期であり昭和三十七年二月一日琉球立法院は国連総会の植民地解放宣言を引用しつつ「アメリカの沖縄支配は国連憲章に違反する。すみやかに施政権を日本に返還せよ」と満場一致で決議した時期である。のち三十九年六月沖縄自民党は内部分裂したがその一方で革新勢力も内部分裂を激化させていてこのような状況を自らのヘゲモニーのもとに有利に展開することはできなかった。

小区分7期―昭和三十九年後半から四十二年二月まで―

日本では佐藤内閣が成立し日本政府と自民党の圧力下に沖縄民主党が結成された時期からこの民主党が強行採決させようとした地方教育区公務員法・教育公務員特例法の教育二法案が大衆闘争の力によって廃案にされた時期まででベトナムにおける「北爆」開

始に伴って基地沖縄の役割が現実的にクローズアップされてきた。

大区分第Ⅱ期―小区分8期から9期まで―

昭和四十二年二月から四十七年五月までで日本政府の沖縄返還政策とそれに対する沖縄人民の闘いの時期であり沖縄問題がようやく国民的な関心事となった。しかし、具体的な形で沖縄民衆の闘いと連帯するまでには至らなかった。返還。

小区分8期―昭和四十二年二月から四十四年二月まで―

沖縄の軍事的重要性を保持しようとする日米両政府の政策が「分離」支配から「返還」の方向へ明確に転換を遂げた時期で教公二法阻止闘争・B52撤去闘争・全軍労一〇割年休闘争・屋良朝苗革新主席の登場など沖縄人民の闘いが大きく盛り上がった。

小区分9期―昭和四十四年二月から四十七年五月まで―

ベトナム政策破綻のなかで軍事基地を残したままアメリカから施政権が日本に返還された。沖縄返還協定粉碎ゼネストなどの大衆運動が起きる。

見てきたように沖縄が戦後歩いてきた道のりは極めて険しかった。そしてそうした厳しい現実には復讐から十八年経過した今日でももちろん変わらないが早くこのような現実とそこに住む民衆の苦悩とを鋭く見据えていたひとりの作家がいた。昭和十三年三月、「糞尿譚」により華々しく文壇に登場した第六回芥川賞受賞作家火野葦平である。かれは生前に三度沖縄を訪れるのだが一度目は昭和十五年五月で劉寒吉・中山省三郎・河原重巳らと十日間滞在した。二度目は十九年九月「麦と兵隊」の従軍作家としてインパール作戦従軍から福岡に帰る途中、飛行機のエンジントラブルのため那覇に二泊した。そしてその変わりように茫然とする。機上から見た幻燈のような美

しい珊瑚礁の海は往時のままであったが地上の風景は一変して、嘗ての琉球特有ののどやかな情趣はほとんど消え失せ全島要塞と化してへ恋人たちのあいびきの場所とされた阿旦の木や、榕樹の並木の下には、鉄兜、着剣鉄砲いかめしい歩哨が立ち、軍用トラックが砂塵をまいて走りまわり、由緒ある亀甲式、掘抜き式、搏風式などの墓地のなかには、弾薬が集積されてい（「歌姫」）るといふありさまなのである。そして三度目は昭和二十九年に日本航空の沖縄航路再開に際して二月八日から十五日までの一週間滞在したがアメリカ占領下の怪異な沖縄の現状に直面しさらに強烈な衝撃を受ける。同時に末弟千博の姿がかれの胸裡を掠めていた。

葦平の弟千博は沖縄戦線で戦死した。終戦後実家に届いた戦死公報には「昭和二十年六月二十二日、司令部と共に玉碎セリ」と記入されていたが後に人から聞いたところではもとより事實はデタラメで昭和二十年三月十三日鹿児島を出帆した八隻の輸送船もろとも東シナ海の藻屑と消えたようである。その弟の面影を求めたのであろう葦平は学徒隊ひめゆり部隊や健児隊が玉碎した沖縄本島南部の摩文仁・喜屋武の平原に行った。そこに立ちつくした葦平は若くして戦塵に散った亡き弟を思いつまでも涙がとまらなかつたという。

II 戯曲「ちぎられた縄」

三度目は、終戦後の昭和二十九年、日航の沖縄航路が再開される機会に、招待されて行った。二月八日から十五日まで、一週間に見た、アメリカ占領下における琉球の複雑怪奇なありさまは、私の胸を刺した。一日、私は嘗て遊んだことのある漁師の町糸満を

通つて、摩文仁・喜屋武の平原に行った。そこは、ひめゆり隊、健児隊などが玉碎した地点で、なお、草原のあちこちに、骨片が散らばり、鐵兜の破片や、粟莢や、つぶれて歪んだコンバクトなどが落ちていた。私はそこへしばらく佇立して、動くことができなかった。私は三人兄弟であるが、三人とも戦場に出、末弟千博は沖縄で戦死した。しかし、彼はどうも上陸はしていないようである。昭和二十年三月十三日、八隻の輸送船團が鹿児島を出帆したが、一隻も沖縄に着いていない。弟はそれに乗っていた。私は會うかぎりの人に、千博のことを訊ねてみた。「あなたの弟さんが、球部隊報道部附として來るといふことは聞いていました」という者は何人かあつたが、千博に會つた人はなかつた。さすれば、撃沈された船團とともに、海に沈んだものであろう。終戦後、しばらく経つて、遺骨箱が届けられ、戦死公報には、「昭和二十年六月二十二日、司令部と共に玉碎セリ」と書いてあつたが、デタラメにきまつている。箱には骨などはなく、「玉井千博之靈」と書いた位牌が入つていた。とはいへ、やはり、愛弟の戦死したのは沖縄戦線に相違はなく、喜屋武平原に立ちつくした私は、いつまでも涙がとまらなかつた。しかし、亡弟はともかく、沖縄戦線の悲劇と、沖縄の人たちの犠牲の大ききの後に來たものは、アメリカ軍の占領と、圧政とであつた。私は沖縄を地獄の名に値すると感じた。しかし、嘉手納飛行場に着いたとき、出迎えてくれた友人は、「滞在中はアメリカの批判や悪口はいわない方がいい。退去命令を食う危険がある」と忠告してくれた。琉球は、無論、日本領土で、九州の沖縄県であるのに、「琉球國」という妙な國が作られていて、日本人であるのに自由に渡航ができないのであ

る。私は、そのとき、沖繩をむざんな「ちぎられた縄」であると思つたのである。本土に帰つてから、小説「ちぎられた縄」(「オール小説」昭和三十一年九月)のほかに、同名の戯曲(「テアトロ」昭和三十一年十二月)を書いた。芝居は、佐佐木隆君演出、劇団文化座によつて、東京神田一ツ橋講堂で上演されたが、沖繩の悲劇が観客の胸に訴えるものがあつたのか、一ツ橋講堂はじまつて以來という超満員をつづけ、昭和三十三年三月、九州公演をしたときも、十九ヶ所、ことごとく満員の盛況であつた。私は、沖繩問題がもつと日本人全體の問題として取り上げられることを望んで居り、さらに琉球をテーマにした長篇小説を書きたい意圖を持つてゐる。

——「火野葦平選集第六卷」「解説」——

昭和三十一年十月十三日から二十三日まで(註1)佐々木隆を中心とする劇団文化座は創立十五年記念公演と題して米軍統治下の沖繩を舞台にした三幕七場の戯曲「ちぎられた縄」を一ツ橋講堂で上演した。原作は火野葦平、演出は佐々木隆、装置・照明・効果・舞踏衣裳考証は村山知義・穴沢喜美男・吉田貢・親泊興昭らがそれぞれ担当した。この記念公演は連日好評であつたらしく朝日新聞はその盛況ぶりを(一ツ橋講堂始まつて以來)の大盛況であつた(註2)と過剰に報道したがその公演用パンフレットの目次は次のとおりである。「悲しき沖繩(火野葦平)」「沖繩へ行けざるの記(中野好夫)」「火野さんの沖繩(高橋義孝)」「装置者として(村山知義)」「沖繩の現況(神山政良)」「沖繩人の過去の歩み(比嘉春潮)」「この十五年(佐佐木隆)」「十五歳の文化座に寄せる(阿木翁助、穴沢喜美男、安藤鶴夫、伊藤寿一、内田吐夢、三好十郎、八木隆一

郎、山形勲)」「十五年目に思うこと(鈴木光枝、荒木玉枝、河村久子)」「昭和十四年の壺屋街」「初日数日前(全員写真)」「文化座主要上演写真集」「稽古場の十五年」「スナツプ」「文化座点描・次回予告」。

葦平の創作エネルギーが無惨にも引きちぎられた(沖繩の悲劇)に向けられたのは知られるとおりだが、たとえば当時九州大学でドイツ語を講じていた高橋義孝は次のような文章でアメリカの暴挙を告発した。(文化座の機関誌「文化座」)にのつてゐる沖繩代表団をかこんでの座談会を読んで、ぼくは今更ながらびつくりした。瀬長という人の発言に「とにかく土地の収奪にはブルトナーザ、カービン銃、装甲車、最後には銃剣で突く、なぐる、足でけるの暴虐、そしてガソリンをぶつかけて焼くんですからね。」とあり、これに対して「一同無言」と続いている。日本人なら、とはいわず、人間なら、誰だつて考え込んでしまふだろう。正義、自由、平和という言葉葉を最も頻繁に口にするのもアメリカ人なのだが、火野さんの「ちぎられた縄」は、アメリカ人に限つては無料で見せてやるといいだろう(「火野さんの沖繩」)。

「正義」「自由」「平和」を恒久の信条とするアメリカ人に対する高橋らしいイロニクな発言と言つてよい。事実当時の沖繩ではこうした信条の裏を行くような軍用地確保のための不当な土地収奪が軍部の強権によって無差別に実施されていて冒頭に列記した時代区分では大区分第I期小区分3期(昭和二十七年四月から三十一年六月まで)の時期に相当するのだが火野葦平は明らかにこのような時代面を鋭く切斷しながら米軍占領下の(民族の苦惱)(「悲しき沖繩」)を一篇のドラマトルギーに仕立てて見せたのである。戯

曲「ちぎられた縄」の内容を見てみよう。

先に触れたように作品は三幕七場から構成される。その舞台背景は昭和三十一年春から夏にかけての那覇（一幕、三幕）と伊江島（二幕）がそれぞれ主要舞台として設定されているが第一幕は（OFF LIMIT 島民立入禁止）（註3）と書かれた（美刈村）の弾薬集積所に鉄屑拾いに来ていた四人の女性のうちの一人が米兵の突然の発砲によって射殺される場面から始まる。こうした場面設定はおそらく同年四月八日に起きた「悦子さん事件」に材を得たものであろう。

「悦子さん事件」は昭和三十一年四月八日の早朝、コザ市越来に住む与那嶺悦子さんがスクラップを拾うために二人の婦人とともに美里村知花の米軍8040弾薬集積所に立ち入ったところを米軍MP隊サバー軍曹に射殺された事件であり、さらに前年には石川市に住む六歳の幼女が米兵に暴行・殺害され嘉手納海岸で死体となって発見された「由美子ちゃん事件」も発生している。米兵の許しがたい暴挙が同時期の沖縄民衆の不安と怒りを買っていた。そうした状況を一篇のプロログに定めて火野葦平は主人公新垣ツルが動いている那覇市ガープ河畔の「思鶴」という飲み屋にその焦点を絞って行く。

主人公新垣ツルは本島本部半島の北西十数キロに浮かぶ伊江島の出身なのだが戦争で最愛の夫を亡くした戦争未亡人であり、また子供を米軍のジープに轢き殺された悲劇の母でもあり、さらには琉球舞踊の名手として世にその名を知られた踊り手でもあった。騒々しい花火が市街を揺るがすペルリ記念日の一日、そのようなツルの前に一人の男性が現れる。食堂の組合長をしている石嶺安良という人

物だがかかれは貿易会社社長・バス会社大株主・立法院議員などの肩書きをもつ儀保大吉の指図によって儀保との結婚を承諾してくれるようにこの「おみつる」を訪れたのである。が、無論、ツルには儀保と結婚しようという気持ちには全くない。というより、亡夫の弟で琉球タイムズ記者の豊平盛忠にひそかに心を寄せていた。そうしたところへSPの腕章を着けた金城国三が入ってくるのだが実はこの金城は例の（美刈村）の射殺事件の現場で米兵の手下となって動いていたSPであり婦人殺しの張本人として巷間の噂に立っていた人物だった。そして場面は次のように展開する。

宮里 （突然はげしい怒りの表情）仲村、この男だ。美刈村の弾薬

集積所で、鉄屑ひろいに行った照屋さんを殺したのは。

金城 （ガク然として立ち上り）何をいうんです？ 僕にはそんな覚えはない。

宮里 今になってかくしたって、証拠はあがっているんだ。貴様だって知っているだろう。一体なんのために、家庭の主婦が鉄屑拾いをしているんだ。生きるための最低の努力なんだぞ。しかも、貴様に殺されたあのおかみさんには、三人の子供があっただ。

金城 （酔いも消えた様子で、オロオロ声）ボ、僕はただ歩哨に立っていただけです。射ったのはMPだ。

宮里 見つけたのは貴様だろう？

金城 MPの方が先に見つけたんだ。僕が報告したんじゃない。僕は見つけると、いつでも立入禁止の札から内側へ入らないように注意していたんだ。

宮里 その立入禁止の札の内側へ、屍体を引きつりこんだのは誰だ？
金城 (黙る)

宮里 札の外側で不法射撃をしておいて、貴様がアメ公を助けて無罪にしたんだ。

金城 (苦しうに) それは……

宮里 俺はすぐ調べたんだ。美刈村のSPの中で、眼鏡をしているのは、貴様、ただ一人だ。

仲村 (興奮して) この野郎、よくも沖繩人を裏切ったな。

金城 (耐えられず、ヒステリックに) そうだ。僕が屍骸を内側に

入れたんだ。ぢや、僕あ、あの時どうすればよかったんだ。

SPだって軍の一員だから、命令には反けない。あの時はM

Pが僕に命令をくだしたんだ。命令をきかずに反抗したら、

僕の胸にズドンだ。命令違反、ちゃんと名目は出来ている。

そうやって殺された者が一体何人いるんだ。あいつらは沖繩

人を殺すことなんか、なんとも思っちゃいない。五人殺した

から、あと五人殺せば一階級あがる。あいつらのなかには本

気でそう思っている奴だってあるんだ。僕だって女房子があ

る。年とったオフクロもいる。僕がいなくなったら、その日

から飢え死だ。(ドス黒いものが胸につきあげてくるのを懸

命におさえつけて) 君、君ならどうするんだ? どうしたら

いいんだ? 教えてくれ。俺りあ、どうしたらいいんだ?

生きるためにやむなくSPをしている金城。こうした、かれの抱え込んでいる自己撞着そのものが沖繩のあからさまな現状を鮮やかに照らし出していると見てよい。そして、そうした矛盾社会の中で

八方塞がりの強いられた生活を営むとき、ひとは、どのような暗部に陥って行くのであろうか。おそらく、わたしたちは、虚無の深淵を覗き込むにちがいない。それはたとえば、これに続いて良識の徒であるべき新聞記者の豊平盛忠が祖国復帰運動に奔走している仲間を横目にそのような運動自体(螳螂の斧だ)と断言する言葉に明らかに見られるであろうし、あるいはまた(今の沖繩では泥棒だけが自由だ)とアナキーに吐き捨てるミジョーキ売りの仲村も間違い無くそのひとりと言ってよい。そしてこうしたニヒリズムはここに登場するほとんど全ての人々に悪しき時代病として、言い古された言葉を使うなら「時代閉塞の現状」として蔓延しているのだが、さらにそれは第二幕の伊江島で展開される軍用地確保のための米軍による強制的土地接収と、ある夜に主人公ツルが二人組のG1から強姦されるという悲劇的な事件によって一層鮮明にクロースアップされてくることになる。だが、こうした舞台装置とは別に、おそらくこの第二幕での最高の見せ場は月明かりの晩に志喜屋長顕・キミ子親子が演じる「女物狂」(註4)という次のような組踊りの一場面であろう。

志喜屋 こりや人盗人、首里わらべぬすど、那覇わらべ引きやり、
國頭(くんじゃん)に売(う)やり、高どしろ売てど、た
かどしろ取(と)てど、うまさ物すけて、うまさ物食わや
り、浮世渡やべる。浮世楽しゃべる。今日のおかる日や、
見る人もないらぬ。かたわらに寄やり、かたわらに立ちや
り、わらべ待ちぬすま、わらべ引きぬすま、引きあわちた
ぼうれ、ひきつけてたぼうれ。ああ、とうと、ああ、とう

と。

キミ子 風車やこれば、風つれめぐる。どしとまいてつれて、遊び
ばしやの。

志喜屋 ああ、願たこと、思たこと、えいわらべの来る。先ず人形
を見せかけ、人はなれまですかし行こう。えい、わらべ、
えい、わらべ。

キミ子 えいえい、四月(しんがつ)がなれば、梯梧(でいご)の
花咲きけり、しいやぼうぼう。

志喜屋 これこれ、とうとう、今日からや、つれて、今日からや、
行きやり、うまさ物呉いらにこの仏とらさ、とうとう歩め
歩め。

キミ子 すだし母親に暇乞もすらぬ、まかえつれ行きゆが、許ちた
ばうれ。

志喜屋 いや、許すことならぬ。放すことならぬ。あびゆらば、あ
びれ、おらびゆらば、おらべ。これ見ちやのわらべ。これ
見りやめ、わらべ。

「女物狂」は別名「人盗人」とも言われる。引用部はその冒頭の
部分であって風車で遊んでいる四人の子供たちのところへ子供をさ
らおうと企んでいる人盗人が現れ、あやつり人形を手蔓に、巧みに
中の一人を誘い出しながら強引に国頭へ連れて行こうとする場面だ
ある。結局、最後は、連れ去られた子供は途中立ち寄った寺の寺僧
の機転によって助けられ、我が子を盗まれて狂女になってさすらっ
ていた母親にも無事再会できて母の狂気も元に戻るといふ筋なのだ
がそうした琉球の伝統的芸能を葦平が戯曲中に登用したことについ

て演出担当の佐々木隆はこのような解釈を付けて劇を演出して見せ
た。(志喜屋長頭が最後に何故「人盗人」を踊ったかと言うこと、
つまり火野さんが、何故「人盗人」を志喜屋に踊らせたか、と言う
ことについては、我田引水かもしらぬが、盗まれた子供がやがて母
親に会えると云うストオリーを、つまり沖繩はやがて日本に復帰す
ることを志喜屋が希望し、信頼し志喜屋自身は、アメリカ軍の沖繩
に対する暴力を「人盗人」の盗人にたとえ、その人物を演じること
によつて俳優の最後の舞台とした、と解釈して演出することにした)
(「この十五年」)。

「執心鐘入」「銘刈子」「孝行の巻」「二童敵討」「女物狂」と
いう組踊五番の中で葦平がなぜこの「女物狂」をことさら登用した
のか、おそらくかれには、佐々木の指摘するような目論見が多分に
ある。なぜなら同じ第二幕でこの時期の沖繩では掲揚することが許
されていなかった日の丸の旗を、天長節の日に、それに逆らつて、
志喜屋長頭に掲げさせるという創作上の操作は親日的かつ反米的示
威行為であつて明らかにそうした意図が濃厚に窺えるからである。

終幕はツルの自殺という悲劇的結末で幕が下りる。先にも述べた
ように伊江島に帰ったツルはある夜二人組の米兵に強姦される。米
兵に凌辱されたツルはその晩自らの命を裁とうとするのだがガジュ
マルにかけた縄が切れてそうした自殺行為も失敗に終わり、畢竟、
身を儀保大吉に売つてその代償として祖国復帰運動のための援助資
金をかれから貰いながら運動に奔走している人々のために少しでも
役立てようと考えるようになった。が、妊娠していることを知る。
無論、強姦されたG Iの子である。このようなツルにはもとよりこ
れからを生きる「生」へのエネルギーは全く残ってはいないだろう。

亡夫豊平良喜の詩集『繩』と陶工島袋秀行の手になる良喜の肖像が完成したその日、彼女は豊平盛忠に宛てた一通の遺書を残して走ってきた米軍トラックに身を投じたのである。このような死にざまは、さながら同じ米軍に轢き殺された子供の後を追うようなあまりにも無惨な死にざまではあったが、葦平はこうした悲劇的な結末を一篇の末尾に付けることによって〈沖繩の悲劇〉を一層悲劇足らしめようとしたと言っただけである。

戯曲「ちぎられた繩」の時代背景は昭和三十一年春から夏にかけてである。既に触れたようにこの時期には「悦子さん事件」や「由美子ちゃん事件」という人を人とも思わぬ残酷な殺戮行為が多発していたが、それと同時に所謂ブライズ勧告（註5）に端を発した軍用地四原則貫徹住民大会などの全島あげての島ぐるみの反対運動も展開されていた。こうした運動はその後瀬長亀次郎を团长とする第一次渡日代表団の上京となり（先に引用した高橋義孝の文章に出てくる〈瀬長〉は瀬長亀次郎のことか）さらには東京日比谷野外音楽堂で開催された「沖繩問題解決国民総決起大会」へと進展して行くことになるのだが、火野葦平はまさにこうした時代状況を文学的視野に入れながら帰るべき祖国を失った「さまよえる沖繩」への万感の思いを込めて一篇のドラマを書き上げたのである。思うに、それは、作家火野葦平ならぬ人間火野葦平のやさしさ故の必然の抗議であったと見える。

III 「不沈母艦沖繩」

葦平と獺との直接的な交渉は詩人淵上毛銭を介してである。詳細

は「葦平と毛銭とバク」「葦平さんとの縁」などの文章を一読していただきたいが、たとえば「ちぎられた繩」については昭和三十一年九月三十日号「日本経済新聞」に「へこんど、文化座で、火野葦平の書下し「ちぎられた繩」三幕六場を上演することになった」とで、この日、劇団側では、沖繩関係の人たち幾人かをまじえ、いろいろと意見をききたいとのことなのであった。「ちぎられた繩」とは、日本からちぎられた沖繩の意味である。四、五日うちには、脚本のプリントが出来るとのことであったが、だれもまだその脚本を読んでいないので、具体的な話はなにも出なかった。ただ、沖繩問題の取扱いについて、席上の葦平さんが「反米的になっても困るし」と言っただけでも、反米的にならざるを得ないよ、沖繩の問題は、話をきいただけでも、反米的にならざるを得ないよ、うな、そういう性質の問題だからである。沖繩現地の土地問題にかかわる抵抗の方法としての「無抵抗の抵抗」にも、その問題の性質が、端的に反映しているわけである（「某月某日」という獺自身身の発言がある）。

右の文章によると「ちぎられた繩」は当初三幕六場であつたらしいのだが、残されているパンフレットを見る限り実際には三幕七場として上演された模様である（ただし、同年十二月号「テアトロ」に掲載された台本は三幕六場である）。ところで、おそらくこの時点かあるいはその前後に、上演テーマと直接に関わるような公演用パンフレット掲載のための寄稿依頼が葦平から獺へあつたに相違ない。こうして山之口獺は劇団文化座の創立十五年記念公演パンフレットに一篇の作品を寄せることになるが寄せられた作品は下記のようなものである。

「不沈母艦沖繩」

守礼の門のない沖繩

崇元寺のない沖繩

がじまるの木のない沖繩

梯梧の花の咲かない沖繩

那覇の港に山原船のない沖繩

在京三〇年のぼくのなかの沖繩とは

まるで違つた沖繩だといふ

それでも沖繩からの人だときけば

守礼の門はどうなつたかとたづね

がじまるや梯梧についてたづねたのだ

まもなく戦禍の惨劇から立ち上り

傷だらけの肉体を引きずつて

どうやら沖繩が生きのびたころは

不沈母艦沖繩だ

いま八〇万のみじめな生命達が

甲板の片隅に追ひつめられてゐて

鉄やコンクリートの上では

米を作るでだでもなく

死を与へると叫んでゐるのだ。

無論、ブライス勸告に揺れる沖繩の苦しい状況を訴えた作品だが
 作品自体は昭和三十九年十二月刊行の遺稿集『錆に錆』に既に見え
 ているもので初見のものではない（詩集収録本文との間になづか

い以外に際立った異同はない）。また、ここに寄稿したことについて
 も早く「葦平さんとの縁」の中に見えていた。が、作品名につい
 ては従来不明であつて今回の調査で初めて明らかになったことにな
 る。ただ、これが初出稿かどうかは現時点では明らかではなくこの
 場で軽々しい判断はできないものの仮に脚本のためだけの依頼詩稿
 であるなら初出稿と見做してもいいように思う。

大正末期に沖繩を出奔した山之口貌は昭和三十三年十月の帰郷ま
 で一度も沖繩に帰らなかつた。そして三十数年ぶりに帰郷した故郷
 に大きな衝撃を受けた。失意の底に落とされた貌は東京に帰つてか
 らも戦争で全くさま変わりしてしまつた故郷を思つて暫くは悄然と
 していたという。だが、そうした貌ももちろん帰郷する前から一変
 した沖繩のようすは知っていた。たとえば「沖繩を思う」という帰
 郷以前に書かれた文章があるが明らかにそれは「不沈母艦沖繩」の
 自作解説であり作品の創作背景を語つたものであつて（註6）これ
 を読む限り山之口貌は人づてにあるいは新聞雑誌の報道によつて沖
 繩の現状を十分に理解していたようである。かれが故郷の現実に如
 何に敏感に反応していたかよく分かる例であろう。事実、かれは、
 ある時期から沖繩問題について積極的に語るようになった（註7）。
 知られるように昭和二十七年四月に発効された対日平和条約以降の
 ことである。今、手許で集計した大まかな資料を参考にすると沖繩
 について触れた貌の文章は次のような数になる（詩篇は除く）。

昭一四年	1	昭一五年	0	昭一六年	1	昭一七年	0
昭一八年	0	昭一九年	1	昭二〇年	0	昭二一年	0

昭三八年	3	昭三五年	13	昭三六年	8	昭三七年	7
昭三四年	15	昭三一年	12	昭三二年	9	昭三三年	3
昭三〇年	6	昭二七年	0	昭二八年	6	昭二九年	4
昭二六年	2	昭二三年	0	昭二四年	1	昭二五年	3
昭二二年	0	昭二一年	0	昭二二年	1	昭二三年	3

(作品の制作年代については「昭和百周年記念事業」の「掲載紙」裏一を参照した)

見てのように昭和二十七年以降、特に三十一・三十四・三十五年
 が際立って多いが周知のとおり三十一年は本稿で触れた島ぐるみ闘
 争が行われた時期であり三十四・三十五年はいうまでもなく帰郷直
 後に当たる。こうした文章制作量から見ても、故郷に対する貌の関
 心がどの時期に芽生えどの時期に多くなっているか鮮明に掌握でき
 るであろう。「不沈母艦沖繩」とはそうした貌の関心の所在をひと
 きわ強烈に印象付けているように思えるのだがその詳細な分析は全
 て今後のことに属する。

註

(1) 東京公演の期間については「戯曲 ちぎられた縄」舞台台本が
 掲載された昭和三十一年十二月号「テアトロ」の〈編集後記〉
 の記事を参照した。ただし、「文化座創立十五年記念公演パン

フレット」中の「文化座点描・次回予告」欄には〈今回の公演
 は沖繩問題解決国民運動連絡会議の後援を得ましたが、東京公
 演終了後の十月十五日には国民運動川崎協議会のあつせんで川
 崎公民館に於て昼夜二回の上演が決定。さらに明年二月には九
 州、中国地方に巡演することになって居ります」とあってこれ
 によると十月十五日以前には少なくとも東京公演は終了してい
 なければならぬ。が、おそらくこれは〈編集後記〉の方が正
 しいであろう。諸事情のため公演が大幅にずれこんだことが
 予想されるからである。また、九州公演について言えば北九州
 若松の「火野葦平資料室」に保存されている資料（チラシ、パ
 ンフレット、チケット）によると昭和三十三年三月十二日（田
 主丸中学校講堂）・三月十四日（長崎市国際文化会館）・三月
 十七日（大牟田市市民会館）にそれぞれ上演されたようである。
 「火野葦平選集第六巻」「解説」によると九州公演は十九箇所
 で行われたという。

(2) 若松の「火野葦平資料室」に保存されている宣伝用パンフレッ
 トを見ると「朝日新聞」以外にも「東京新聞」「日刊スポーツ」
 「文芸」（新年号）「新劇」（十二月号）に公演評が掲載され
 たことがわかる。

(3) 「OFF・LIMIT」について『沖繩大百科事典』（「沖繩
 タイムス社」昭和五十八年五月刊行）から引用する。（治安や
 衛生上の理由から、米軍当局が軍人・軍属・家族にたいして特
 定の民間地域への出入りを禁止した〈立入禁止令〉。逆に軍施

設内や周辺には住民にたいするオフ・リミッツの立札があった。施政権返還前の沖縄経済は、基地への依存度が高かったため、米軍は立入禁止令を効果的な住民制裁手段として用いた。米軍はデモや抗議集会があると、〈米人と住民の摩擦を避けるため〉との理由からその地域をオフ・リミッツにしたが、本当の狙いは米人客相手の商店街や風俗営業地区を経済的に締めあげることにあった。そのため基地に隣接する市町村は、この〈ヘムチ〉を最も恐れた。島ぐるみ闘争（1950年代）の最中、琉球大の学生によるデモを口実に中部一帯に無期限オフ・リミッツが宣告され、関係市町村は〈反米集会は開かせない〉〈瀬長亀次郎を住民代表と認めない〉などの言質を米軍に与えて、禁止令を解いてもらった〉（宮城悦二郎）。

(4) 葦平の作品中の「女物狂」の本文と筆者の見た「伊波普猷全集第三巻」所収「校註 琉球戯曲集」本文との間には若干の異同がある。同巻「解題」によると組踊集には多くの異本があるというが葦平がどの本をテキストとして使用したかは調査していない。

(5) 「プライス勸告」について『沖縄大百科事典』（「沖縄タイムス社」昭和五十八年五月刊行）から引用する。（一九五六年）昭和三一（六月）に発表された米国下院軍事委員会特別分科委員会（委員長メルヴィン・プライス）の報告書、とくにそのなかの〈勸告〉のこと。五五年五月の第一回渡米折衝の結果、プライス調査団が沖縄に派遣されることになり、同年、一〇月二三

日から二六日までの四日間、沖縄で公聴会と軍用地視察をおこない、その調査結果と勸告が報告書として下院軍事委員会に提出された。同報告書は、沖縄の軍用地問題を理解する前提として、米国の沖縄占領の経緯と軍用地問題の争点（沖縄の特殊性＝伝統的農業経済、米国の一括払い計画と沖縄側の増額地料の毎年払い要求）および沖縄基地の重要性を指摘し、ついで争点について委員会としての論評をおこなったうえで、具体的に一二項目の勸告をしている。主要な勸告事項は、①無期限に必要なとされている財産などにたいして取得すべき権利はフィー・タイトル（永代借地権あるいは絶対所有権）か、または現行法のもので、あるいは現行法の修正によって得られる最高の権利であること、この場合には、財産の公正な全価格が支払われるべきこと、②財産の評価について、農耕地は、おもに農業の生産性に考慮を払い、商業財産については、比較売買法を用いるべきこと、③新規接収は、最小限にとどめることとし、不要地の返還をなすこと、などであった。結局、一括払い反対、新規接収反対などの土地を守る四原則に基づく沖縄側の要求にたいし、同勸告は、地料の算定について譲歩したにすぎず、主要な点は聞き入れられなかった。なかでも、地料の一括払いによるフィー・タイトルの取得勸告は、沖縄側の期待を裏切るものであった。同勸告を契機に〈島ぐるみ闘争〉がおこった（安次富哲夫）。

(6) 該当箇所は以下の部分である。〈このころになって、一米国人によって沖縄の人権問題が積極的に世界の眼前に取り出された。〉

アメリカの接収する土地の借上料坪当りが、B円で月当り平均十八銭で煙草一個、コココーラ一本にも値しないという風な取り扱いを受けていることだけでも、住民の生活がどのようなに苦しいものであるかと推察しないではいられない。こうして、沖繩の生産地帯が、コンクリートやアスファルトや鉄に化けてしまつて、住民は、いわば、軍艦の甲板の上で生活しているようなものだ。朝日新聞社発行の「琉球その後」の写真をみると、沖繩出身であるところのぼくの目にさえななが沖繩だか見当もつかないほどの変ぼうをきわめていて風景、風俗のすべてが植民地になつてゐるのだ（「沖繩を思う」）。

(7) 仲程昌徳氏（『山之口貌 詩とその軌跡』法政大学出版局・昭和五〇年九月・二三〇頁「注」参照）によると昭和二十八年「新潮」五月号に掲載された「祖国琉球」以後のことであるといふ。

（一九九一年三月稿）

——筑紫女学園短期大学講師——

付記

本稿を成すにあたっては若松市民会館内の「火野葦平資料室」の御厚意を得た。特に御遺族の玉井鬮志氏並びに鶴島正男先生には資料の提示をいただきました。厚く御礼申し上げます。